

機械式時計復興の黎明期、世界に
名前を轟かせた独立時計師がいる。

ダニエル・ロート。

彼は自らのブランドを持つほどの
成功を収めたが、やがてブランドを
離れ、またひとりの時計師に戻った。

ジャン・ダニエル・ニコラ。

希代の時計師がひとりで作り上げる
トゥールビヨン、ジュウ渓谷の伝統を
今と未来に橋渡しする、いわば
タイムカプセルになろうとしている。

Direction by YOSHIMASA Kikuchi
Report & Text by MASAYUKI Hirota
Photograph by SHUN Karbe

Mr.DANIEL ROTH

1945年

ジュネーブ近郊フランス領ナンチュアに生まれる。

1960年

ニースにある工業学校で時計やアクセサリなどの製造技術を学ぶ。

1963年

ルクルト・トレーニングコースにて技術習得。

1964年

オーデマ・ピゲ入社。ほぞ磨きやガンギ車の噛み合わせなど薄型ムーブメントの調整に携わり、高度な技術を習得。

1970年代

ショーマがブレゲ社の復興をはじめ。その後ブレゲ社復興に参加し、ブレゲの時計の基礎研究に取り組む。同時にル・サンティエの時計学校で1年間、複雑時計の製作技術に磨きをかける。そして、その卒業製作で作成したバーベチュアルカレンダーの懐中時計は、なんとブレゲ名を冠して売られるほどの完成度だった。

1980年代

腕時計サイズのトゥールビヨンを製品化することに成功。“アブラアン・ルイ・ブレゲの再来”と称されるなどスイスを代表する時計師として一躍脚光を浴びる。

1988年

自らの名「ダニエル・ロート」を冠するブランドを設立。

2000年

ブルガリなど大手資本が入るなど、自身の時計作りが思い通りにいかなかったことに思い悩んだ末、意を決して自ら同社を去ってしまう。

2001年

再び自らのブランド「ジャン・ダニエル・ニコラ」を立ち上げ、ル・サンティエの自宅兼アトリエで、キャリッジが2分で1周する近代前例がない“2 ミニッツ・トゥールビヨン”の開発に着手。



INTERVIEW DANIEL ROTH

ダニエル・ロート氏

ブレゲの復興に携わり、やがて自らの名を冠したブランドを立ち上げたダニエル・ロート氏。彼はこう語る。「しかし私は自分ひとりで時計を作るという夢を果たしたかった」。ジャン・ダニエル・ニコラの設立までの歩みを彼自身に語ってもらうことにしよう。

「育ちはフランスのニースだね。学校の成績が悪いので、アクセサリーや時計、革製品などについて学ぶ工業学校に行かされたのが、時計に触れるきっかけだった。ある授業のなかで先生が、『最も美しい時計はジュネーブやジュウ渓谷で作られている』と語って、ジュウ渓谷という場所に興味をわいた」

そこで彼は、学校を卒業するや、ジュウ渓谷にあるオーデマ・ピゲの門を叩いた。面接したのは、同社の名社長であったジャック・ルイ・オーデマ氏だった。「若い君は何をしたんだ」とジャック氏に聞かれたよ。そこで『色々なことを学びたい。とにかく難しいことを学びたい』と答えたんだ。入社が決まったけれど、条件を付けられた。給料は人より安いこと。ジャックさんは『君は勉強するんだから、給料は安くて当然だ』と言ったのさ。その通りだね」

彼は同社で、時計に関する基礎を勉強した。ホゾ磨きを2年、ガンギ車の調整を2年、そして爪石調整を2年。しかし、これはただの勉強ではなかった。彼が担当したのは、同社の最も薄いムーブメント、キャリバー2003だったのである。その薄さはたった1・64mm。複雑時計を得意とする時計師でも、部品の仕上げや組み立ては難しいだろう。

「学校で時計の勉強しているときは、本当に時計師になっていいのかな、と迷っていたよ。その後、オーデマ・ピゲで熟練した時計技師たちと働くようになって、情熱がわいてきた。難しい仕事だったけ

ど、完成したときに誇りを持たし、何よりうれしかったんだ」

その後、アフターサービスも担当し、時計師としての腕を磨いていったロート氏。宝石商のシヨーム兄弟によるブレゲ買取が、彼にとつての大きな転機となった。ブレゲを買収したシヨームは、ブレゲの再興を牽引する、若くて優秀な時計師を探していたのである。

「オーデマ・ピゲ時代にホゾ磨きなどを教えてくれたのが、ガストリエという老練の時計師だった。彼はブレゲに入社し、シヨーム兄弟とともにオーデマピゲの工房見学にやって来た。見学とは名ばかりで、彼は私に目を付けていたんだね。ガストリエは、復興したばかりのブレゲに入社しないかと誘う。そこでパリに向いて、シヨーム兄弟と面接した」

結果は採用。ロート氏曰く、率直だったことが決め手だった、と言う。「履歴書には、できることとできないことを書いたんだ。できることーホゾ磨き、精度の調整、時計のメンテナンスなど。できないことー複雑時計のすべて。パーペチュアルカレンダーやミニッツリピーターの設計や組み立てなど」

シヨーム兄弟は彼に対して、入社して欲しいが、その前にル・サンティエの時計学校で複雑時計を1年間勉強すること、と条件を付けた。そして学費を払うが、卒業製作をブレゲ銘で販売すること、とも要求した。

「ブレゲという名前だけはあったが、設備も現物もまったくなかった」と語る



ダニエル・ロート氏の卒業製作にして、復興ブレゲの第1作となった永久カレンダー懐中時計の設計図。作図は1975年9月1日とある。永久カレンダーをまったく理解していなかった彼は、わずか1年でここまでの設計を完成させた

ダニエル・ロート氏が完成させた永久カレンダー懐中時計。左は量産モデル、右は第1作。後にロート氏は、このモデルを縮小した永久カレンダー腕時計を作り上げた







山から見下ろしたジュウ渓谷。湖沿いの左手に、ダニエル・ロート氏の自宅兼工房がある。彼はニースから移り住んだが、母方の祖父はラ・ショードフォンの出身、曾祖父はケース製造を行っていた、と言う。この地に戻ったのは必然か



(上) スイスのアーティストが描いた、ダニエル・ロートの時計。ロート氏は、ダニエル・ロート社の社長まで務めたが、時計も資料もほとんど持っていない。絵と時計が数えるほど残るのみだ。(右) ダニエル・ロートの時代に、彼はレトログラードの開発を進めた。これは当時の資料



“色々なことを学びたい。 とにかく難しいことを学びたい。”

ロート氏。シヨーム兄弟は、複雑時計もわからない無名の時計師に、ブレゲ再興のすべてを委ねたのである。しかし果たせるかな、シヨーム兄弟の賭けは成功した。時計学校に入学したダニエル・ロート氏は、たった1年で永久カレンダー付きの懐中時計を自製したのである。

彼が時計の写真を見せてくれた。その完成度は、卒業製作の水準をはるかに超えるものだった。そして永久カレンダーもさることながら、ベースに使われているエポキシ樹脂がとくに素晴らしい。このエポキシ樹脂かと尋ねたところ、彼は笑いながら答えた。「それは私が真鍮で作った物だよ。昔の時計学校では当たり前だったのさ」と。

そしてさらに彼は説明を続けた。「ル・サンティエの時計学校では、手作業だけで、ひとつの時計を作り上げることを学んだ。そこで私は永久カレンダー付き懐中時計を作ったわけだ。ムーブメントが完成したら、ブレゲ用のケースと文字盤が付けられて、パリに送られた。文字盤はメタラム製、針はユニベルソ製だったかな。せっかくなので作った時計が運ばれていったときは涙が出たよ。時計はシヨームのブティックに並べられ、2週間後に売れて、私の学費が払われた、というわけさ」

卒業後、彼はブレゲに入社。しかしロート氏が頼りにできたのは、ガストリエ氏がくれたブレゲの本だけだった、と言う。彼はこう漏らす。「ブレゲは美しい時計の方法論を1から

10まで理解していた。デザインについても、機構についてもね。だから本心を言うと、ブレゲの時計を勉強したければ、働かなくていい身分、ブレゲの研究だけに集中できる身分にならないとダメだ。友人のジョージ・ダニエルズ（独立時計師）みたいにね。残念ながら、私はそうでなかった（笑）」

彼は文献だけを頼りに、様々な機構を開発していった。腕時計用の小さな永久カレンダーやパワーリザーブ機構など。

「ブレゲの文献を見ると、パワーリザーブ付きの懐中時計が載っている。シヨーム兄弟に「腕時計にもパワーリザーブを付けたい」と言ったら、2人とも「じゃ、やれ、やれ」とけしかける。休暇でニースに帰ったのだけど、その間、パワーリザーブの機構をずっと計算していたよ。電話がかかってくるから休めない。結局、日焼けもせずに戻ってきたね（笑）」

かくして完成したのが、ブレゲを代表する傑作、Ref. 3130だった。その完成度が高かったことは、今なお現役であることから想像できよう。

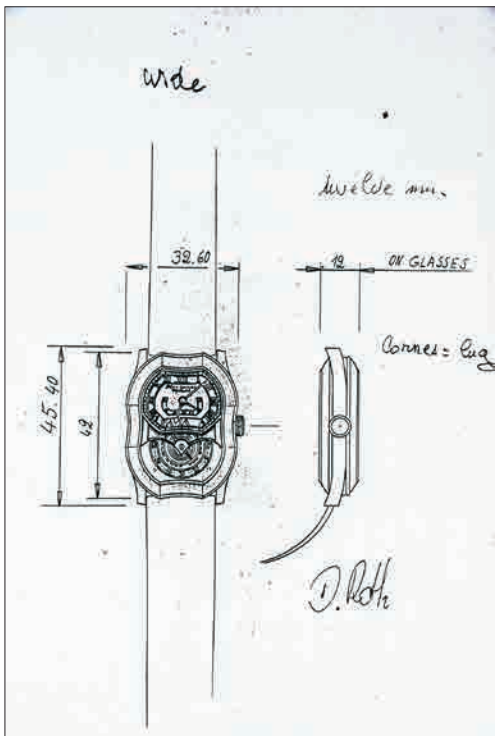
様々な発明をしたブレゲ。その中で彼が最も魅せられたのは、いうまでもなく、ブレゲを代表する複雑機構のトゥールビヨンだった。

「ブレゲのトゥールビヨンはとてもいいと思ったね。そこで腕時計にも載せようと思った。懐中時計と腕時計の違いはキャリアッジの重さだね。ゼンマイトルクの違いを考えなければいけない。キャリアッジを軽くすれば動くし確信して、と



自宅兼工房の内部。いかにも時計師の家らしく、整理整頓は完璧で、床にはちりひとつ落ちていない。妻のニコラ氏曰く「ダニエル・ロートは完璧主義者」

「昔は家族のことを顧みられなかった」と語るダニエル・ロート氏。しかし現在は、家族3人で、穏やかな環境で時計を作っている。左は息子のジャン氏。CADを駆使して、部品の設計などを行っている。右は妻のニコラ氏



2000年にダニエル・ロートを退社したロート氏は、ジャン・ダニエル・ニコラ銘の、2分間ツールビヨンの設計に取りかかった。これは当時の図面。ロート氏曰く、設計に1年、プロトタイプの製作に1年を要した、とのこと。その間収入はゼロだったが、ためらいはなかったという

にかく軽く設計したよ。確かブレゲ時代に2個作った」

後にこのツールビヨンの設計は、ブレゲとダニエル・ロートに引き継がれ、両者に大きな成功をもたらすことになる。加えていうならば、現在あるツールビヨンのほとんどは、ダニエル・ロート氏が手がけたツールビヨンの設計を踏襲している。

ブレゲの時代は良かった、シヨーム兄弟は物作りの哲学をわかっていた、と語るロート氏。しかし、再び転機がやってきた。投資に失敗したシヨーム兄弟が、ブレゲとシヨームを投資会社「インベストコープ」に売却したのである。ロート氏は、投資会社からの誘いを受ける前に独立を決意。自らの名前を冠した「ダニエル・ロート社」を立ち上げたのである。1988年のことだ。

「本当はブレゲにいたかったんだ。しかしシヨームがつぶれて、大好きなシヨーム

メ兄弟がいなくなってしまう。ほかに選択肢がなかったのさ」

彼は自らの名前を冠したダニエル・ロート時代について、多く語ろうとしない。「最初の6カ月は良かった、良いパートナーを得ることが大事だ、そして社長になった私は私でなかった」。これが彼が語ってくれたことすべてである。外から見ると、当時のロート氏は、成功した独立時計師として、人もうらやむような立場にあった。しかし彼には鬱々たる思いがあった。ル・サンティエ時代のように、ひとりで時計を作れないのか、と。

2000年、彼は好待遇を蹴ってダニエル・ロート社を退社。息子のジャン、妻のニコラの名を冠した新しいブランドを立ち上げることになる。名前はジャン・ダニエル・ニコラ。数十年のキャリアを経て、彼は再び、ひとりの時計師に立ち返ったのである。

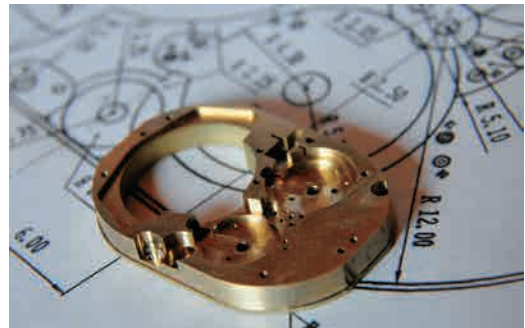
時計師ダニエル・ロートを支える、19世紀の手法

古典的な時計作りをしている、と標榜する時計師は少なくない。
しかしダニエル・ロート氏ほど、昔の手法を踏襲する時計師は希だろう。
その一部始終を、彼が明かしてくれた。



ダニエル・ロート氏に、時計作りの師匠と言える人間はいない。しかしひとり挙げるならば、オーデマピゲ時代の、アンリ・ギニヤール氏になるだろう。彼はこう語る。「私がオーデマピゲに入社したとき、教育してくれたのがギニヤールだった。私が20代そこそこのときに、彼は70代だったんじゃないかな。あまりの厳しさに、彼の上に車が落ちてくれれば、と何度も願ったよ」。

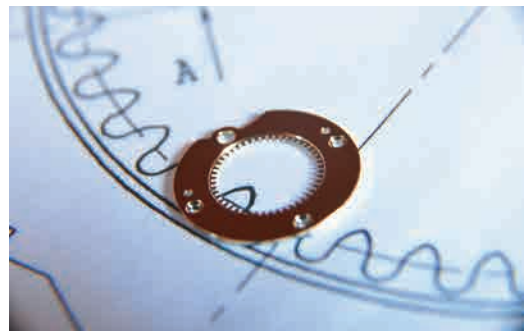
彼は、ギニヤール氏の工具も使って、ジャン・ダニエル・ニコラの時計を作っている。工具箱には1919年、とある。つまりダニエル・ロート氏は、19世紀の教育を受けたギニヤール氏たちのやり方を引き継いで、時計を作っているわけだ。



(上) ツールビヨンの設計図。古典的な手法を用いるロート氏だが、設計にはCAD、部品の大きな製造にはCNCなどを使っている。(下) 完成した地板。現在こういった部品は、外部メーカーに製造してもらっている、とのこと。「自分でもすべての部品は作れる。しかしそうすると年産1本がせいぜいだろう」(ロート氏)

筆者の知る限り、ここまで古典的な技法を守る時計師は、彼以外に存在しない。一例が素材への焼き入れだ。現在は、高級時計メーカーであっても、素材の焼き入れを省くところが少なくない。しかしロート氏は、すべての鋼に対して、焼き入れと焼き戻しを加えている。しかもその手法が、19世紀そのままなのだ。

彼は鋼で作られた部品を、木炭の上に置いてバーナーであぶる。木炭に置くのは、輻射熱で素材の反りを抑えるため。素材が赤くなったら、彼は油を塗って冷やし、それをプレスして歪みを完全に取る。焼き入れのあとは焼き鈍しだ。真鍮の粉を置いたプレートの上に部品を置き、バーナーであぶって青焼きする。温度は



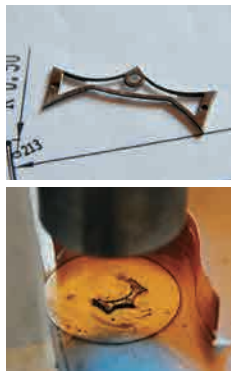
2分間ツールビヨンの特徴が、内側に刻まれた歯だ。これにより、キャリアジの回転を2分間に1回転に抑えることができる。可能にしたのは、最新のワイヤ放電加工機だ。今や古典的な手法の伝道師となったロート氏だが、反面、1980年後半からCNCを部品製造に使うなど、最新技術のチェックにも余念がない



約320度だ。そのまま常温で放置することで、鋼には粘りが出る。なお、彼は青焼きをそのまま残すという。理由は、手作業で磨く際、青焼きがあれば、磨いたポイントがわかるためだという。20世紀初頭の腕時計も、こういう作り方をしているのか、と聞いた。

「当然だよ。これが昔からのジュウ溪谷の伝統だった。私はそれを守っているだけだ。復興当初のプレゲも、始めたばかりのジャン・ダニエル・ロートも、そうやって部品を作っていたよ」

彼は工房内をせわしなく動き、部品一つひとつに、焼き入れと焼き戻しを加えていく。途方もない作業だ。「私は1900年から30年ごろまでの時



ジャン・ダニエル・ニコラの真骨頂が、部品の焼き入れと焼き戻し。(左) すべての鋼製部品は、木炭の上で焼き入れされる。木炭だと、照り返しで歪みにくいという。(右上) 焼き入れされた部品。この状態だと柔らかいので、焼き戻しを加えていく。(右下) 焼き入れした部品は、すぐにプレスされ歪みを取る。「昔はプレスする人、焼き入れする人と作業が分担されていた」

金属の磨きで最も難しいとされるのが、鋼に施す鏡面仕上げだ。ロート氏の手法は、19世紀から伝わるもの。錫板の上に2ミクロンの研磨剤を塗り、部品を丁寧にこすりつけていく。息をかけたただけで曇るほど繊細な仕上げを、彼は最長、1部品につき1週間近くをかけて施していく。曰く「これもジュウ溪谷の伝統的な手法」





経験が長いだけあって、ダニエル・ロート氏は優秀なサプライヤーから部品を購入している。(左) 2分間ツールピジョン用の主ゼンマイ。これは、香箱に引っかけるクランプの大きな、新型のゼンマイである。「6種類ぐらい試して、いちばん良いものを採用した」とのこと。製造はジェネラル・リゾール社だ。(右) こちらはテンプ周りの部品。やはり製造は外部メーカーによる。加工精度は非常に高いが、ロート氏はすべて完全に再仕上げを施す

青焼きではなく、焼き戻しの工程。真鍮の切粉を入れたパレットに部品を置き、アルコールランプで加熱していく。青くなったらすぐ引き上げて、常温で冷却する。(左) 加熱後の部品。(右) 加熱中。彼はこの作業を、すべての銅製部品に対して施している

「雨が降っているほうが、細かい傷が消えていいんだ。乾燥しすぎていると良くないね。だから鏡面仕上げは天気次第だね。良ければ2日、天候が悪ければ1週間かかる場合もある」

計技師と同じ作業を行っている。その当時やっていた仕事を現在も保持するのは、私の欲びだね。これこそ一生やりたかった仕事だ」

天眞の磨きも、やはり昔風だ。天眞自体は、外部から部品として買ってくる。そこに焼き入れを加え、手作業のみで寸法を調整していく。

「納品時は大体100ミクロン。この部品は104ミクロンだね。ツールで磨いて、72ミクロン(=1000分の72mm)にサイズを抑える。73は許容できるけど、71はダメだね」。

ちなみに天眞のサイズが5ミクロン違うと、精度は5秒変わってくる。それを知っているが故に、ロート氏は天眞の加工精度を極端に高めている。普通に仕上げると2時間かかる、とこともなげに言う。では実際にやってみよう、と言いつつ彼はツールに天眞を取り付けて磨きだした。79ミクロン。使っているツールを見ると、「ルイ・エリゼ・ピゲ」のサインがある。伝説的な時計師、ルイ・エリゼ・ピゲの工具と言えば、スイスでは国宝並みの価値がある。その工具を、彼は当たり前のように使って、天眞の加工作業を続けている。

金属部品のブラックポリッシュも、やはり古典的なやり方だ。亜鉛の板に2ミクロンの研磨剤を塗り、部品をこすりつけるようにして磨いていく。やはりこれも、昔の時計師に倣った手法そのままだという。

「雨が降っているほうが、細かい傷が消

えていいんだ。乾燥しすぎていると良くないね。だから鏡面仕上げは天気次第だね。良ければ2日、天候が悪ければ1週間かかる場合もある」

加えて彼は、昔の技法だけでなく、独自の手法も加えるようになった。一例が、ペルラージュだ。彼は穴開けの機械に地板を取り付けて、ゆっくり回しながらペルラージュを置いていく。位置決め精度は驚くほどで、数ミクロンの誤差もない。彼はペルラージュを施す箇所すべてに対して、完全な位置決めを行い、ひとつひとつペルラージュを施していく。作業自体は他社と同じだが、完全な位置決めというプロセスは、ほかにないものだ。ただし手間は途方もなくかかる。トゥールピジョンの地板を例に取ると、ムーブメント側で四つ、文字盤側で四つ。ペルラージュを入れる作業だけで、1日以上かかるのも納得だ。

「作業自体は難しくはないんだよ。ただ、機械の調整に手間がかかる。部品に高い加工精度を要求しなければここまで時間をかける必要はないだろう。しかし私は完璧を目指したい」

ひとり時計を作りたい、という夢を果たしたダニエル・ロート氏。彼は胸を張ってこう語った。

「今やっていることの多くは、時計学校や、オーデマ・ピゲなどで学んだものに依っている。アンリ・ギニャールに教えてもらったりしてね。しかし、時計作りの内容としては昔の1000倍以上に進歩したと思うよ」

カナの磨き。使用するのはポプラのディスク。そこに2ミクロンの磨き粉を付けて、カナを当てて丁寧に磨いていく。「コツは、少しだけ光るように仕上げる。磨きすぎは問題だ。どのくらい磨けばいいかは、音を聞けばわかるよ」

加工中の天眞。古典的な機械を使い、つぶすようにサイズを調整していく。理想は72ミクロン。ただ歯車のホジ径などは、穴石の実寸に合わせて変えるという

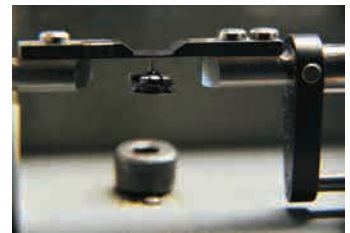
(上) 納品された天眞のサイズをチェック中のロート氏。「100ミクロンでお願いしているが、この固体は104ミクロンだね」。(下) 検査中の天眞。オーデマ・ピゲ時代にまず天眞の加工からキャリアを始めたロート氏は、当然のことながら、天眞の加工精度には極めて厳密だ



カナの磨き。使用するのはポプラのディスク。そこに2ミクロンの磨き粉を付けて、カナを当てて丁寧に磨いていく。「コツは、少しだけ光るように仕上げる。磨きすぎは問題だ。どのくらい磨けばいいかは、音を聞けばわかるよ」



加工中の天眞。古典的な機械を使い、つぶすようにサイズを調整していく。理想は72ミクロン。ただ歯車のホジ径などは、穴石の実寸に合わせて変えるという



(上) 納品された天眞のサイズをチェック中のロート氏。「100ミクロンでお願いしているが、この固体は104ミクロンだね」。(下) 検査中の天眞。オーデマ・ピゲ時代にまず天眞の加工からキャリアを始めたロート氏は、当然のことながら、天眞の加工精度には極めて厳密だ

4

ペルラージュの工程。高級時計には当たり前のように施されているが、ジャン・ダニエル・ニコラのそれは、手間のかかり方が尋常でない。理由は、完全なペルラージュを施すため。①地板のセンタリング。穴開け機械に地板を置き、マイクロメーターで正確に置く場所を決めていく。その誤差は数ミクロン以内。②地板の上を研磨する作業。紙の上にダイヤモンドパウダーを混ぜたオイルを塗り、その上に地板をこすりつけていく。ロート氏曰く「これは私が考え出した工程。ずっと秘密だったんだけどね(笑)」。

③ペルラージュを施す工程。円の中心が重なるよう、時間をかけて施していく。④完成したペルラージュ。仕上がりは完全だ



1



3



2



ジュネーヴ風仕上げの工程。上下方向に傾けたゴム砥石を、地板に当てて模様を付けていく。左右に傾いていないため、線と線の間は歪む可能性がある。しかしロート氏の熟練した手腕は、明確な稜線を与えることに成功した。「コツは、弱い力で、地板に当たる程度に施していくこと。一気に施そうと思うと、模様が汚くなる」

ジャン・ダニエル・ニコラのムーブメントには、ジュネーヴ風の筋目仕上げが施されている。と言っても、まったく異なるものだ。普通のジュネーヴ仕上げは、バイトやゴム砥石を左右方向に傾けて、模様を付ける。対してジャン・ダニエル・ニコラのそれは、上下方向に傾けて模様を着けていく。現行品での採用例は、これのみだろう。「昔のヴァシュロン製トゥールビヨンには採用されていたよ」



時計師ロートの集大成 2分間トゥールビヨン

堅実な構成を持つ、ジャン・ダニエル・ニコラのトゥールビヨン。しかし子細に見ていくと、これはまさに、時計師ロートの集大成であることがわかる。入念な仕立てや、良く考え抜かれた設計、そして優れたパッケージングなど、時計としての完成度は比類ない。

ひとりで時計を作るために、あえて独立の道を選んだダニエル・ロート氏。彼が発表したジャン・ダニエル・ニコラのトゥールビヨンには、当然ながら、彼の半世紀にも及ぶキャリアと経験が投じられている。いわば、時計師ダニエル・ロートの集大成が、2分間トゥールビヨンと言えそう。

まずは設計から。最大の特徴は、キャリッジが2分間に1回転する点。

「私はブレゲとダニエル・ロートのためにトゥールビヨンを作った。今普通のトゥールビヨンを作っても、模倣と言われるだろう。だからほかにない物を作りたかった」

可能にしたのは、ワイヤ放電加工機で抜いた4番車と、それに噛みあう減速用の中間車だった。普通、キャリッジの回転が遅くなると、精度は不安定にな

る。しかし生半な1分間トゥールビヨンより優秀な精度を叩き出す点に、時計師ダニエル・ロートの実力がうかがえよう。ちなみにテンプの振り角は、平置きで300度から320度、縦位置でも270度から280度。決して軽くはないキャリッジを載せていることを考えれば、極めて優秀だ。

またダブルバレルという試みも、初出が2000年代であることを考えれば、十分に新しい。とりわけ、香箱の間に2番車のカナを挟んで偏心を起させないという構成は、輪列の耐久性を延ばす優れたアイデアと言えるだろう。

ブレゲで初めて取り組んだパワーマー表示も、ロート氏のお家芸と言えるものだ。彼は非常にコンパクトなパワーマー表示を得意としてきたが、ジャン・ダニエル・ニコラでは、一層そ

れが際立っている。これだけ大きな表示を、小さなサイズに収めた手腕はやはり非凡と言うほかない。彼が今まで作ってきた機構を考えると、耐久性にも問題はないはずだ。

仕上げに関しては、すでに述べたとおりだ。19世紀の手法を駆使し、加えて彼独自の製法を加えた結果、ジャン・ダニエル・ニコラの時計は、現行品とは思えないほどの緻密な仕上がりを持つに至った。加えてこの時計は、パッケージングも極めて優秀である。小振りだが身の詰まった重さをここまで感じさせる時計は、やはり現行品では希だろう。

価格は2808万円。年産数本、しかもすべてに対してロート氏が加えている作業量と時間を考えれば割安だろう。今これほどの時計を作れる時計師が、世界に何人いるだろうか？



特徴的な“バイオリンケース”は、近隣の熟練工が製作した物。量産品とは明らかに異なる面構成と磨きを持っている。文字盤に施されたギョーシェも、極めて密なものだ



ケースバック。洋銀製のムーブメントはすべて手作業で仕上げられている。このムーブメントで特筆すべきは、巻き味と刻音。これは21世紀の腕時計だが、往年の懐中時計を思わせる感触を持つ



2 minutes Tourbillon

【ムーブメント】

25石／振動数：毎時18,000／パワーリザーブ：60時間／部品点数：主要パーツ71点+ピス類45点 総数116点以上／サイズ：35mm×24mm×5.9mm／素材：ジャーマンシルバー

【ケース】

素材：プラチナ950／サイズ：42mm×32mm×11mm／防水性：防塵、日常生活防水／ベルト：アリゲーター

¥28,080,000（税込）

取材を終えて

時計ジャーナリスト 広田雅将
Masayuki Hirota

筆者が知るタニエル・ロート氏とは、うつろな目をして、パーティーでお酒を飲んでいる人物だった。彼が言うところの「私が私でなかった時代」、つまりは社長時代のロート氏である。

かつての偉業は理解していたが、もう優れた時計を作れまい。当時の筆者はそう思っていた。

しかしジャン・タニエル・ニコラ以降、彼は一転して卓越したトゥールビヨンを、そうやって差し支えなければ、往年の傑作を超えるような時計を手がけるようになった。同時に、彼の眼光には輝きが戻り、発言も見識ある時計師ならでのものに変わっていった。

筆者は著名になり、富を得て、志を失ってしまった時計師たちを知っている。そこから戻ってこられた人は数えるほどもない。しかもロート氏ほど短期間で戻れた例は、皆無だろう。かつて「ニースに帰ることばかり考えていた」見習い時計師は、時計を作るという夢を果たすことで、ついに自らを取り戻したのである。

一面、ロート氏については、こういう話も聞いていた。曰く、大変に気むずかしい、曰く、インタビュはやりづらいなどなど。確かに家族の支えがあるとはいえ、ひとりで時計を作っているのだ。普通の人と、どこか違うのは当然だろう。筆者たちは丸2日間にわたって、ロート氏と膝を突き詰め合せて話す機会を得た。彼は気むずかしいのではなく、正真正正の時計師なのだ、というのが率直な印象だった。普通、高名な時計師というのは、

多かれ少なかれ、お金や名誉を意識する。

しかし彼からは、良い意味で、そういう気分をまったく感じなかった。すべてを得て、そしてまたひとりに戻ったロート氏は、今、何の雑音もなく、創作に専念できているのだろう。ロート氏はこう語る。「今は本当に世界でいちばん幸せだ。年を取るほど幸せになっていくよ。確かに昔は困難な時期もあった。しかしその段階があればこそ、今があるのではないかと思うよ」。

ジャン・タニエル・ニコラの時計を触っている際、筆者はしばしば、19世紀の卓越した懐中時計に向かい合っているような錯覚に襲われた。理由のひとつは、彼が往年の製法を守っているためだろう。しかしより大きな理由は、彼が昔の時計師に同じく、創作に対して純粋な喜びを見出せるようになったから、ではないか。しかしいくら理由を挙げても、百聞は一見にしかず、だ。取材中、詳細を暴こうとする筆者に対して、ロート氏は「本当は時計に説明なんていらんだよ」と笑ってみせた。本心を言えば、筆者もまったく同感だ。これほど卓越した時計とその作り手を、空虚な言葉で説明するのは、無駄というものだろう。

もし機会があるならば、ぜひ彼の時計を手にとってほしい、と思っている。確かに価格は安くはないし、見るチャンスもまずない。しかし希代の時計師が最後に至った境地は、目で確認するにしくはない。それは限りなく澄み切っていて、言葉を失うほど圧倒的だ。

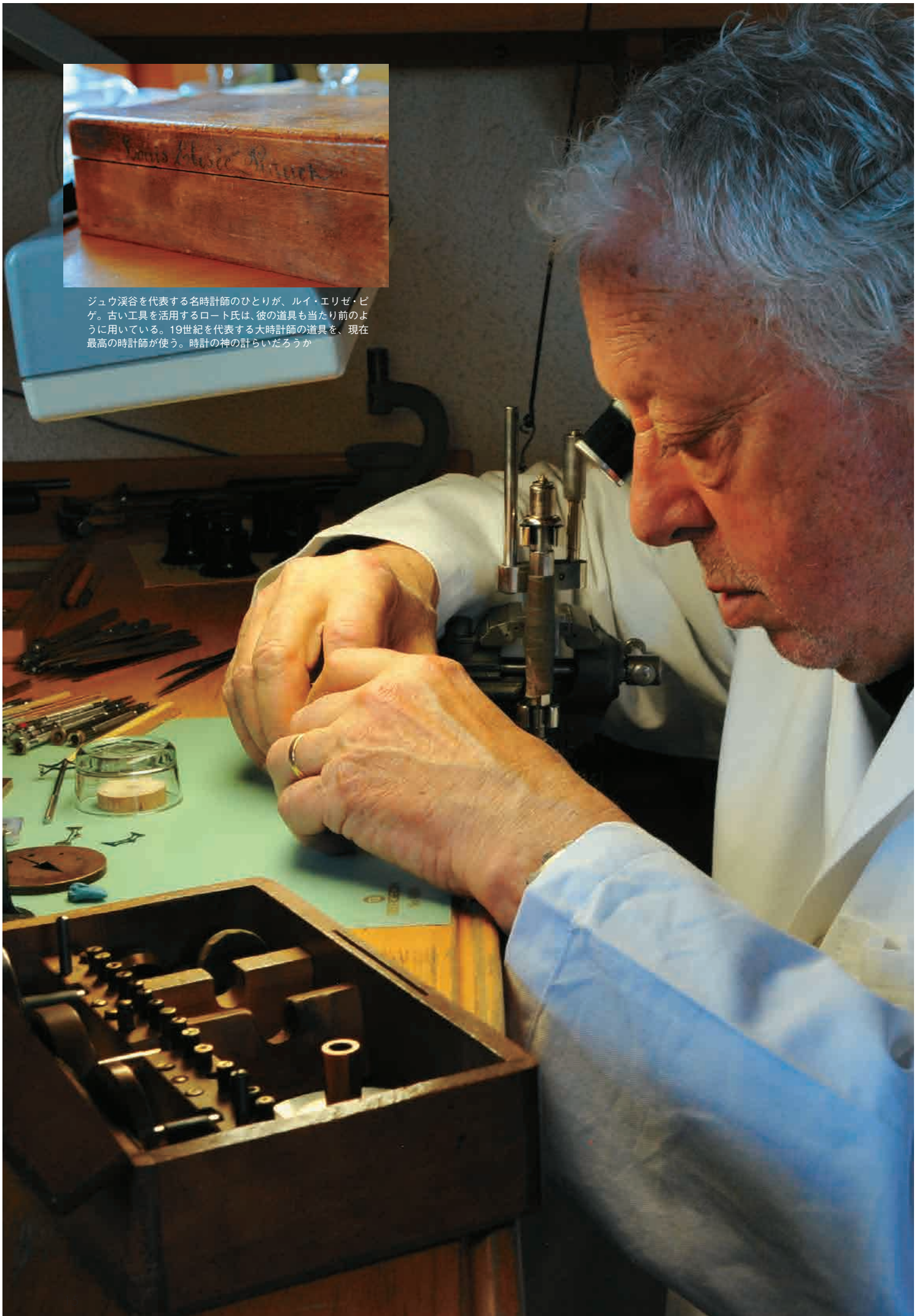


PROFILE

1974年大阪府生まれ。大学卒業後、外資系企業やITベンチャーなどを経て、2004年から時計ジャーナリストになる。現、時計専門誌「クロノス日本版」主筆。国内外の専門誌や一般誌に寄稿多数。海外のジャーナリストや時計関係者にも知己が多いため、国内外の時計賞でも審査員を務める。



ジュウ溪谷を代表する名時計師のひとり、ルイ・エリゼ・ビゲ。古い工具を活用するロート氏は、彼の道具も当たり前のように用いている。19世紀を代表する大時計師の道具を、現在最高の時計師が使う。時計の神の計らいだろうか





JEAN DANIEL NICOLAS

Shellman

Diamond Bldg,5-9-12 Ginza, Chuo-ku, Tokyo 104-0061

TEL 03-5568-1234 <http://www.shellman.co.jp> online@shellman.co.jp

ジャン・ダニエル・ニコラ

JEAN DANIEL NICOLAS

by Mr. Daniel Roth

19世紀の技法を貫く
今世紀、最後のキャビノチエ。

